73

華岡青洲が全身麻酔薬を使って行った乳癌手術を欧米に紹介したのは誰か？

高橋　均

華岡青洲の全身麻酔の欧米での評価は、E. Gurltが書き記した“Geschichte der Chirurgie und ihre Austübung”が最初であり、この記事により全世界の注目を喚起し、華岡青洲の名声が世界に知れ渡ったと言ってよいとされてきた。本書物は、ドイツで一八九八年に出版された外科学の歴史に関する大著である。まず、この書物の中に紹介された華岡青洲の記事の部分を紹介する。

十九世紀の初めの頃、華岡氏によって、外科学に新しい技術が導入されたのであった。しかもまた、彼によって、それを基盤とする新しい体系が打ち立てられたのであった。彼は結紮や手指圧迫により主動脈系統の出血を止めながら、メスやハンマーを使うことによって大手術を成し遂げたのであった。彼は手術前、患者に対し、非常に多量の蔓陀羅華剤を服用せしめた。これがために患者は三日間も意識を失っていたというのである。

しかし、私は、W. Norton Whitneyが一八八五年に書き記した書物“Notes on The History of Medical Progress in Japan”を古書店から入手する機会を得た。その書物には、華岡青洲が行った全身麻酔薬の処方構成、彼が提唱した内外合一・活物窮理の理論までもが詳細に述べられている。この書物に紹介された華岡青洲の記事を紹介する。

杉田が言及した中国および日本の外科的治療については、郭が著した、華岡　震（伯行、青洲とも呼ばれた）が考察した記載は、更に進歩はあるが、後日問題解決に役立つだろうとある。華岡は紀州出身で、医家に生まれ、吉益南涯から内科、大和見水から外科の指導を受けたと言われている。各地を旅して、故郷に戻り、次のような教えを説いた。「薬物療法の原理に古医方も近代医学もない。内科も外科も治療原理は同じである。古医方の教

義に偏見をもてば、現今の実力者の教義を理解できなくなるおそれがある。身体の内的状態に注意を払わなければ、どうやって外部に発現した疾患を把握しながら治療をすることができようか。蘭方医は理論的に最も詳細をきわめるが、治療法は雑である。これに対して、中国の科学は実務において確かに綿密であり、すなわち正確であるが、過去の理論に捉われている。従って、私は治療に関して、適応については生体のみを頼りにし、方法を模索し、その後で賢者から意見を求める。その後、治療を行うにあたって、原則に縛られず、しかし必要に応じて行動する。鍼灸治療のほか、薬剤が有効でなければ、腹部および背部を切開し、胃腸を洗浄することもあり、患者を救えると思うことであれば何であれ行う」と。そのような大胆な手術を行うときに、華岡は次の成分からなる麻酔薬を用いた。曼陀羅花・草烏頭・白芷・当帰・川芎。この五種類の物質を煎出し、微紛になるまで煮詰めて、患者に投与すると、即座に意識がなくなり、そして、この状態で手術を行った。他の医師には治療できない種々の外科的疾患に対して手術が行われたが、その中でも、乳癌、骨壊死、痔瘻、腺病および良性腫瘍が挙げられる。このような手術は坐って行われ、術後は湯液と膏薬を用いた。功を奏したのは、多くの草花が周りにあったことであるが、一方治癒しないと判断された病に苦しむ患者が、あちこちから治療を求めて華岡のもとへ集まった。華岡の弟子であった水戸出身の本間玄調（棗軒とも呼ばれる）は、自身の経験と合わせて師の教えをまとめ、「瘍科秘録」を著した。本間は、切開して動脈瘤の手術を行い、動脈の結紮も行った最初の人物である。

この翻訳文からも明らかなように、華岡青洲の業績を世界に知らしめたのは、日本の医学界で従来言われてきたE. Gurlfではなく、W. Norton Whitneyであると確信し得た。

（近畿大学医学部救急医学）